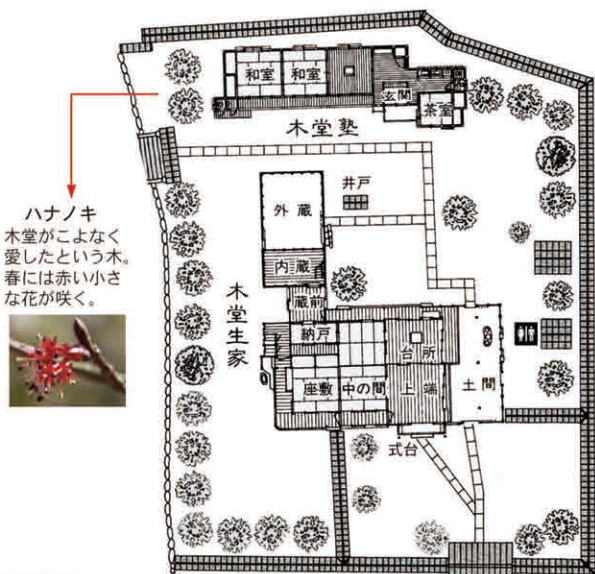


犬養家は代々この地方の大庄屋や郡奉行を務めた旧家で、その建物は、昭和51年(1976)に犬養家から岡山県へ寄贈され、翌年には、犬養 毅(号 木堂)の生家であり、江戸時代後期の郡奉行・大庄屋の屋敷として文化的価値が高いことから、岡山県指定の史跡とされた。

昭和53年(1978)には、主屋と土蔵が国の重要文化財に指定され、その後解体修理が行われ、現在は18世紀前半の姿に復元されている。

主屋の構造は和小屋で、屋根は本瓦葺き、居室まわりを一段下げて鍛葺きとし、縁側を回している。また、武家住宅に似て式台を設け、座敷には付書院も整備されている。



犬養公之碑

駐車場から犬養木堂記念館までの途中にある顕彰碑。この奥には、分骨された木堂と息子健の墓がある。



石碑「犬養木堂翁生誕之地」

この碑の文字は、同じ川入出身の植物学者大賀一郎博士(「大賀ハス」で著名)による。



主屋



座敷

台所



主屋と庭



主屋と土蔵

犬養木堂記念館のご案内

●開館時間 9時～17時(入館は16時30分まで)

●休館日 火曜日(祝休日は除く)
祝日の翌日(土・日は除く)
年末年始(12/28～1/4)

●入館料 無料

●交通

〔電車〕JR山陽本線 庭瀬駅下車
タクシー5分または徒歩約25分(約2km)

〔バス〕岡電バス(086)223-7222、両備バス(086)422-4199
岡山駅より下撫川經由
中庄駅行または倉敷駅行
庭瀬本町下車 徒歩約15分(約1km)

〔車〕岡山駅方面から新幹線側道(県道242号)西行き
川入交差点約50m先に駐車場有り
(普通車22台・バス2台)

※カーナビ等ご利用の場合は、
「犬養木堂記念館駐車場」で検索してください。

〔周辺地図〕



(犬養木堂記念館は、記念館駐車場から徒歩約5分)

問い合わせ先

犬養木堂記念館

〒701-0161 岡山市北区川入 102-1

☎086-292-1820 FAX086-292-1825

URL <https://inukaibokudo.jp>

指定管理者

(公財)岡山県郷土文化財団

〒700-0822 岡山市北区表町1-7-15 702号 ☎086-233-2505



憲政の神様 犬養毅を顕彰する

犬養木堂記念館



木堂記念館

平成5年(1993)に、木堂生家隣接地に建設されたもので「憲政の神様」と称された政治家 犬養木堂の業績をしのび、木堂の遺品、写真、手紙、書などゆかりの資料を保存・展示している。

また日本庭園も整備されており、新緑や紅葉など四季を感じることができる。



記念館入口門



中庭から見た記念館



前庭



白砂を波に見たて、瀬戸内海をイメージした中庭(秋)



常設展示室内



20歳の木堂
洋学を勉強しようと、明治8年
(1875)上京した当時の写真。



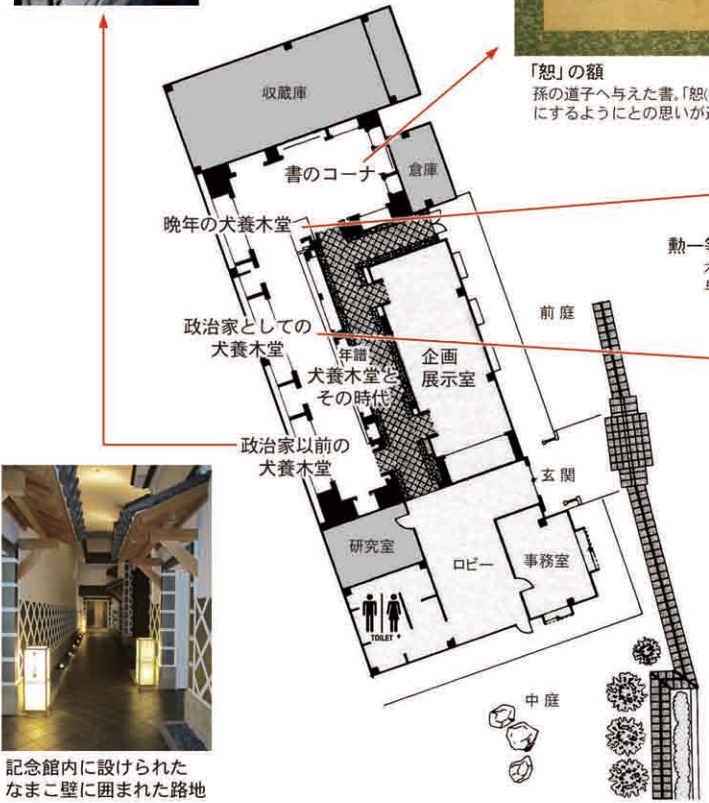
「恕」の額
孫の道子へ与えた書。「恕(ゆるす)の心を大切に
するようにとの思いが込められている。



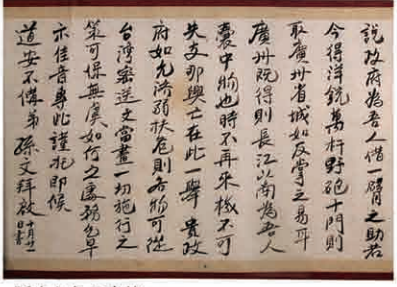
勲一等旭日桐花大綬章
木堂が亡くなった後
与えられた勲章。



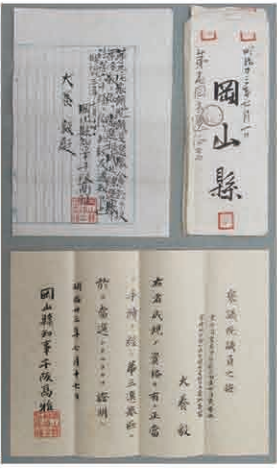
五・一五事件を伝える号外新聞
昭和7年(1932)5月15日の襲撃事件で
撃たれた木堂の容態を伝える号外。



記念館内に設けられた
なまこ壁に囲まれた路地



孫文からの書状(部分)
1900年、孫文らが挙兵した時に木堂へ武器援助や日本
政府への働きかけを頼んだ手紙。



第一回衆議院議員当選証
1番多く得票したという通知書と
衆議院議員に当選したという証書。

犬養 木堂

犬養毅(号 木堂)は、明治から昭和にかけて活躍した政治家で、昭和6年(1931)に第29代内閣総理大臣となり、翌7年(1932)五・一五事件で海軍青年将校らの凶弾に倒れた人物である。

木堂は、安政2年(1855)に備中国庭瀬村川入(現岡山市北区川入)の大庄屋の次男として生まれ、明治8年(1875)20歳で上京。上京後は郵便報知新聞に寄稿しながら、慶應義塾で学ぶ。明治10年(1877)には休学して、従軍記者として西南戦争の戦地へ赴いている。明治13年(1880)慶應義塾中退後、「東海経済新報」や「秋田日報」、「朝野新聞」などでジャーナリストとして活躍する。

明治23年(1890)第一回衆議院議員選挙で岡山から出馬して当選、以後連続19回当選し、政府に対抗する旗手として活躍。大正初めごろの憲政擁護運動では、先頭に立って活躍し「憲政の神様」と称される。また、多くの国民の政治参加が必要との考えから、納税要件を撤廃しようと普通選挙法の実現に力を注いだ。明治中ごろから、中国の孫文やベトナムのファン・ボイ・チャウなどアジアの人々と交流を持ち、人脈を使って彼らを支援した。

昭和6年(1931)12月、内閣総理大臣となり、犬養内閣を組閣。満州事変で悪化した中国との関係改善をしようと試みるが、翌年5月15日、首相官邸で海軍青年将校らの銃弾を受け、夜半に死去した。その時の言葉とされる「話せばわかる」は、議すること、直接話すことを重視する木堂の姿勢を現すものとして今も伝えられている。

また、書にすぐれ、「木堂」「木翁」「白林遯叟」などの号で揮毫された多くの書が残っている。



昭和5年(1930)山梨県にて